

[2019年度 入選]

ふしぎ発見！ 銭湯の魅力

西川 遥夏

目次

- 第1章 はじめに
- 第2章 入浴のはじまりから銭湯の衰退まで
- 第3章 スーパー銭湯と銭湯の違い
 - 1. 法律の規定による違い
 - 2. 利用客の違い
 - 3. 利用頻度の違い
 - 4. 目的の違い
- 第4章 銭湯の魅力
 - 1. 外観の魅力
 - 2. 内装の魅力
- 第5章 人と歩んできた銭湯
 - 1. 常連さんの「日常」と初めて来る人の「非日常」が交差する銭湯
 - 2. 性別を超えた店主
 - 3. 銭湯の注意書き
- 第6章 銭湯の再生

第1章 はじめに

この論文の目的は、銭湯のおもしろさを知ってもらい、現代から消えつつある文化をあらためて見直すことが目的だ。総務省によると平成20年では浴室の保有率は95.5%で、ほとんどの家庭で内風呂がある現状だ。公衆浴場に入りに行く人もいれば、修学旅行でみんなとお風呂に入った経験しかない人だっている。筆者は主にスーパー銭湯へ家族と出かけていた。今回の研究では、2019年6月から9月までの期間に京都市にある30数軒の銭湯に入りに行った。この論文では、筆者の銭湯の直接観察も含めて銭湯について語りたいと思う。

厚生労働省の浴場業概要では、今日は、ヘルスセンター、健康ランド等郊外の大型レジャー浴場等に加え、一般公衆浴場並みの料金で食事や休憩、娯楽施設も併せ持つスーパー銭湯の増加が目立っている。一方で、一般公衆浴場(銭湯)は4,293施設となり相変わらず減少している。町の銭湯が最盛期の1968年には全国に1万8,325軒あった(町田, 2016, p.1)。減少の要因として、自家風呂の普及に伴う入浴者数の減少等による経営の悪化や後継者難による廃業、その立地を利用した他の事業への転換などがあげられる。銭湯は時代の流れで消えてしまうかもしれない。ここでは現代から消えつつある銭湯の魅力について伝えたい。

第2章 入浴のはじまりから銭湯の衰退まで

日本では入浴や銭湯はいつから誕生したのだろうか。第2章では、入浴の変遷を、町田(2002)、町田(2016)、中野(2016)を参考に簡略化して説明していきたい。日本の入浴の歴史は仏教伝来が深く関係している。入浴の起源は、仏像を湯で洗い浄めた「禊」がルーツだ。

風呂のはじまりは、寺院での病人のための施浴からはじまり¹、鎌倉時代のころからは、施浴がさらに病人以外の一般人にも及ぼされるようになった。

銭湯、つまり有料の入浴場のはじまりは明らかではないが、文永3年(1266)の『日蓮御書録』に「湯銭」の文字が登場し、京都・八坂神社の『祇園執行日記』(1343～1372)には、「後醍醐天皇の元享年間(1321～1324)に雲居寺の境内に銭湯を設けた」という記事があることから鎌倉時代には、銭湯のようなものがあったとも考えられる。

江戸風俗を彩る町風呂の誕生は、『慶長見聞集』(1614)²によると、徳川家康入府の翌天正19年(1591)、伊勢与市という者が、現在の常盤橋と呉服橋の間にあった銭瓶橋の河岸に銭湯風呂をつくり、永楽銭一文で入浴させたのが最初といわれている。湯は高温で煙が浴室中に充満していて、熱い蒸気で息がつまりそうだったということから、蒸し風呂であったのではないかと考えられている。

銭瓶橋あたりに銭湯が登場してわずか20年あまりのちには、町内ごとに1軒くらい銭湯が営業していたという。その形式は、同様に蒸し風呂だったと思われる。また、参勤交代の諸大名や城下町の商人などを相手にする「湯女」と呼ばれる女性を置く銭湯、「湯女風呂」が増加した。前出の『慶長見聞集』によると、湯女は客の髪を整えたり、湯上りの酒の席での相手をしたり、枕を共にしたりするのが仕事だった。江戸の人口は、男性が女性よりも圧倒的に多く、男性が女性と気軽に遊べる場所として湯女風呂は大変人気であったらしい。湯女風呂は吉原のように特定の範囲に限って営業を公認されていたものと違い、幕府の取り締まりの対象だった。

江戸時代初期における銭湯様式には、大きく分けて2種類あったようだ。ひとつは「戸棚風呂(資料1)」と呼ばれた蒸し風呂形式で、おもに蒸気浴を楽しむものであった。深さ30センチメートルほどのところに湯が張ってあり、ここにつかるのだが、浅いので体全体はととも入らない。蒸気を逃さぬよう周囲を板で囲い、入浴する時は引き戸を開けて入る。形がまるで戸棚のようなのでこの名前がつけられたという。当然のことながら、中は真っ暗で、さらに、たくさんの人が入れないという欠点があった。そこで考え出されたのは「ざくろ口(資料2)³」と呼ばれた形式だ。戸棚風呂の入口にあった引き戸のかわりに、高さ1メートルほどの低い出入口をつけ、内部に畳3枚ほどの湯船を置くことで、多くの人が入浴できるようになった。しかし、相変わらず蒸気を逃さない



資料1 戸棚風呂(歌川広重『泉湯新話』、国立国会図書)(出典:町田, 2016, p.21)



資料2 ざくろ口(山東京伝『賢愚湊銭湯新話』、東京大学総合図書館所蔵)(出典:町田, 2016, p.22)

ように周囲を囲い、小さな窓がひとつある程度であった。したがって中は薄暗く、ざくろ口から入る時は、声をかけたり、咳払いをしたりするなど、何かと気配りが必要だったという。当時、戸棚風呂の銭湯を「風呂屋」、ざくろ口の銭湯を「湯屋」と呼んでいたと思われるが、より多く湯が使えるざくろ口の銭湯がだんだんと主流になっていった。

ここで、江戸時代後期に主流になった「湯屋」について、もう少し述べてみることにしよう。当時の風俗を記録した『守貞謄稿』^{もりさだまんこう}（喜田川守貞著、1853年）によると、江戸の多くの銭湯は男女別だったが、上方は混浴だったとされている。もっとも男女別の場合でも、入口は分かれているが湯船はつながっているなど、その形式はいろいろあったようだ。江戸時代以前から、温泉地の多くが混浴だったことは、奈良時代に記された地誌『出雲国風土記』に、鳥根県の玉造温泉での老若男女の混浴の様子が紹介されていることからわかる。このような習慣が、銭湯における混浴の風習を定着させたと考えられる。幕府は混浴による風紀の乱れを取り締まるために男女混浴の禁止令⁴を出す⁴が、しかし、江戸時代の法令は「三日法度」といわれ、三日も経てば守られないといった具合で、混浴禁止もなかなか徹底しなかった。また興味深いこととして、混浴の場において見合いもおこなわれていたようである。さらに基本的には自由恋愛の少なかった時代、銭湯は男女秘会の場所としても利用されたという。

話を銭湯の造りに戻そう。江戸の銭湯は戸を開けて中に入ると、今でもお馴染みの「番台」⁵がある。板の間の脱衣所⁶と浴室はワンルームで、洗い場に蛇口などはなく、三助⁷や番台が上がり湯（体を流すためのお湯）を柄杓で汲んで桶に入れた。このように、江戸時代の銭湯は小さい、狭い、暗いという状態であったにもかかわらず、庶民の憩いの場であった。

江戸時代から明治時代初期までの銭湯には2階に座敷があり、男性のみの休憩所としてさまざまな使われ方をした。当初は武士が刀を預ける場所だったが、のちに湯に入った後に茶菓子を食べたり、囲碁や将棋をしたりするために使われるようになった。さらに浄瑠璃語りや講談、時には生け花の会場となるなど、かなり自由な社交場として利用されたようだ。風俗が乱れるとして湯女風呂が1657年に禁止されてからは、2階に小部屋をつくり、そこでかつての湯女がサービスをするということもあった。さらに、床にはめ込まれた格子から下の脱衣所などをのぞくこともできたようだ。外では位の高い武士も、裸になると商人や町人と同じ扱いを受けていたようだ。しかし、社交場であった2階も、1882年までには東京においては、ほぼ廃止された。

明治10年(1877)には、鶴沢紋左衛門なる人物が、全国各地の温泉地の浴槽からヒントを得て、神田区連雀町に、従来とは異なる、かなり開放的な構造の銭湯を開店した⁸。狭い入り口のざくろ口を取り払い、浴槽を板の間に沈め、浴室の天井を高くして湯気抜きの窓を設けた。それが評判となり、庶民からは「改良風呂」と呼ばれ、その後の銭湯の定番スタイルとして広まった。しかし、夜間の照明はランプ、浴室の床や浴槽は木製で、まだ個別の蛇口は無く、江戸時代と同じく浴槽からお湯を汲みだす方式だった。この改良風呂は明治時代の主流となり、大正の中頃まで続いた。

大正時代に入ると、銭湯業界に「改良風呂」以来の大きな変化が現れる。それが、「タイルの使用」だ。現在でも、大正期に建てられた古い銭湯の一部には当時の装飾タイル(マジョリカ風タイルなど)が使用されている。もっとも、一般的な白地の無地タイルが使用されるのは大正後期に入ってからだ。さらに昭和3年(1927)には、浴室の湯・水に水道式のカーンが取り付けられ、衛生面でも向上していった。

昭和16年（1941）12月18日の真珠湾攻撃を境に、日本は太平洋戦争に突入した。応召により、主人や従業員を軍隊に取られた銭湯も多く、戦時中の営業は困難をきわめた。この間、貴金属器の供出、営業時間の短縮、入浴時間の制限、空襲警報による営業停止など、営業上のさまざまな問題があった。戦争突入の年には東京都内に2,796軒あった銭湯も、昭和20年（1945）の終戦時に戦禍を免れた建物は400軒たらずだった。当時の銭湯はとところによって男女混浴でしかも常時超満員だった。さらに、それをいいことに盗みを働く者も多く、悪状況だったようだ。

その後、昭和30年代（1955～1964）に入ると浴場数は急激に増加し、戦後の庶民生活を支える重要な公共施設として活躍した。銭湯の浴室にシャワーがつくようになったのは、昭和30年代（1955～1964）に入ってからだ。そして、各家庭に内風呂が浸透し始めるのも丁度この時期で、銭湯が減少の一途を辿り始めた。

銭湯から派生して誕生した健康ランドやスーパー銭湯もここで少し紹介しておく。温浴ビジネスマネジメント&プランニングの小林経営企画事務所、スーパー銭湯・日帰り温泉などの温浴施設の企画・設計の玉岡設計から参照していく。

自家風呂の普及は庶民に新たな贅沢と欲求を生み出した。それまでは家で風呂に入ることが贅沢であったのが、お金を払ってお風呂に行くことが贅沢という真逆の欲求が生まれ始めた。その「お金を払ってお風呂に入る贅沢」を生み出したのが「健康ランド」だ。健康ランドの第一号店は愛知県七宝町の「中部健康センター」（1984年開業）と言われている⁹。健康ランドは入浴料金2,000円程度で、温泉旅行気分を味わえ、「身近で贅沢なひととき」を求める人々の心をうまく掴んでいた。その後、演劇、プールなど、より高い付加価値を創造し、健康ランドは巨大レジャー化・投資拡大が進んでいった。そして、1990年代に入り、「バブルの崩壊」が起こる。巨大化、投資拡大化した健康ランドは消費低迷を真正面に受け、売上・収益は激減し、多大な投資に事業が押しつぶされていくことになる。

このような社会情勢を背景とし、「低価格」「低投資」「大量集客」を軸とした温浴事業として登場したのが「スーパー銭湯」だ。スーパー銭湯は、健康ランドから入浴以外の付加価値を低減することによって低投資化していく方向性と、町の銭湯が生き残りを賭け¹⁰、自家風呂のある方にも利用してもらえようレジャー的付加価値を加えていくという、二つの方向性から誕生したものだ。1990年代中頃から、スーパー銭湯は景気減退・消費低迷という社会環境に適応し、低価格で身近なファミリーレジャーとして大盛況ぶりを見せ、都市部を中心に加速度的に増えていった。バブル崩壊の影響を受けた企業の遊休地活用として、スーパー銭湯は企業の多角化戦略の手段となったことがさらに加速度を増す要因でもあった。加速度的に増加し続けたスーパー銭湯は、2000年代中頃になると、都市部を中心に競争激化状態が進む。競争市場に参入してきた後発施設は既存施設を凌駕すべく付加価値の増大と施設の拡大を進め、「ミニ健康ランド」状態になっていく¹¹。

第3章 スーパー銭湯と銭湯の違い

1. 法律の規定による銭湯の違い

江戸時代では享楽の施設でもあった銭湯は規制されて、体を清潔に保つことが目的の銭湯へと変遷した。その銭湯から派生したのが健康ランドやスーパー銭湯である。第3章では、

銭湯とスーパー銭湯の違いについて追求していきたいと思う。

銭湯とスーパー銭湯は法律によって区別されている。公衆浴場は、公衆浴場法によって「一般公衆浴場」と「その他の公衆浴場」に分けられる。「一般公衆浴場」とは地域住民の日常生活において保健衛生上必要なものとして利用される施設で、物価統制令(昭和21年3月勅令第118号)によって入浴料金が統制されている。いわゆる「銭湯」の他、老人福祉センター等の浴場がある。「その他の公衆浴場」とは保養・休養を目的としたヘルスセンター・健康ランド型のもの、ゴルフ場やアスレチックジム等スポーツ施設に併設されるもの、工場等に設けられた福利厚生のための浴場、サウナ、個室付き公衆浴場、移動入浴車、エステティックサロンの泥風呂等がある。「一般公衆浴場(銭湯)」は新規開業する場合に隣の公衆浴場との間に一定の距離を置かなければいけない。また、料金の上限が決められているなどの規制がある一方で、水道料金や固定資産税の減免措置を実施している自治体が多い。スーパー銭湯の料金がまちまちなのは価格統制がないので市場によって決められるからだ(林, 2011, p.123)。

2. 利用客の違い

銭湯とスーパー銭湯の違いは、法律では上記にあたる。次は利用客の立場になって各々を利用する違いを考えていきたい。門田は埼玉県中央地域の銭湯とスーパー銭湯の共存について研究していて、スーパー銭湯の誕生が銭湯の減少要因なのかを調査している。調査報告の銭湯とスーパー銭湯の違いが参考になるので、ここで紹介したい。

門田は銭湯とスーパー銭湯の共存要因としてまずあげられるのが、「中心客層の違い」であるという。門田が調査した埼玉県中央地域にある銭湯とスーパー銭湯での聞き取り調査の結果では、「銭湯」は65歳以上の層が利用客の半数を占める店舗もあって高齢者の利用が多い。さらに36～64歳までの層も合わせた中高年層が利用客に占める割合は、全店舗埼玉県中央で65%以上となっている。「銭湯」は中高齢者、なかでも高齢者が中心客層の施設であるといえる。一方、「スーパー銭湯」では、銭湯と比べて16～35歳の層の割合が40%を占める店舗があるなど、この層の利用が全体的に高くなっている。反対に65歳以上の割合は20%という店舗もあり、全体的に低くなっている。このように「スーパー銭湯」は高齢者層が多いというような偏りはなく、幅広い年代が利用する施設であるといえる。ここから、高齢者の利用が銭湯の存立基盤となっており、こうした中心客層の違いが銭湯とスーパー銭湯を共存させているといえよう(門田, 2013, p.23)。門田の研究では「銭湯」は65歳以上の層が利用客の半数を占め、さらに36～64歳までの層も合わせた中高年層が利用客に占める割合は65%以上という数字が出てきた。

上記の研究では、埼玉県中央地域と地域を限定したので、全国の銭湯の利用客数の割合がこの結果だとは限らないが、京都府公衆浴場入浴料金協議会資料(平成20年公衆浴場経営実態)より京都府の「銭湯」の利用者の年齢構成は60歳以上の利用者が44.7%と半数近く、40～60歳以上で75%以上を占める割合になっている。京都の銭湯は九割が京都市に存在する。また、京都市は人口の10%を学生が占めている町で、京都は他都市と比べれば、まだ若者が銭湯を利用している町でも利用客の半数近くは60歳以上なので、他都市はもっと高齢化が進んでいるだろう(林, 2011, p.136)。と記述している。さらに、厚生労働省では高齢社会を迎え、高齢者や障害者が利用しやすいように公衆浴場に一定の改造を加えた上で、

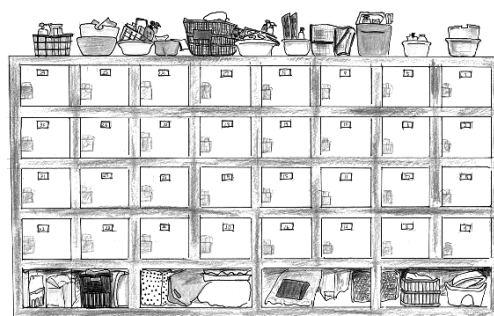
その公衆浴場を利用して入浴介助等を伴う入浴事業を実施する福祉入浴援助事業が平成10年4月より固定資産税の軽減措置の対象とされた。このように、高齢者の利用が多いというデータと国の事業をみると、銭湯には高齢者との深い関係性があることが理解できる。

3. 利用頻度の違い

2節で銭湯の利用者の半数近くが高齢者である一方で、スーパー銭湯は幅広い世代が利用する施設だとわかった。水不足ではない日本では、お風呂に入って身を清潔にすることが当たり前だ。一日に数回入るお風呂好きもいる。そのくらいお風呂は身近にあるものだが、銭湯とスーパー銭湯では利用頻度の違いはあるのだろうか。3節では客の利用頻度の違いを見ていきたい。

門田は常連客の多寡と利用者の来客頻度また、この「中心客層の違い」は施設側からみた常連客の多さ、利用者自身の来客頻度の違いとなってあらわれているという。銭湯は常連客の割合が高く、いずれの時間帯においても、平均して70%以上が常連客によって占められている。銭湯には季節による来客数の変化もほとんどない。こうした事実は、銭湯が「習慣性」を持った利用客に多く利用される施設であることの証左であると考えられる。一方、スーパー銭湯では、朝の時間帯は他の時間帯に比べて常連客の割合は高いものの、それを除けば、全ての店舗で常連客の割合が40%台よりも低い。また、スーパー銭湯での季節別の利用をみると、秋に比べ夏、春の方が利用者は多い。冬の利用が一番多いことから、寒い時期に利用者が多くなるとはいえるが、秋に比べて夏や春の方がかえって利用者が多いということ、寒さとの関係だけでは説明できない。むしろ、スーパー銭湯では、寒さや暑さに関係なく、休暇の多い季節に利用者が多いためではないかと考えられる。こうしたことからスーパー銭湯は「レジャー感覚」を持った利用客が多い施設であるといえよう。このように、銭湯では「習慣性」、スーパー銭湯では「レジャー感覚」というように、利用者の行動・目的の違いがあることがうかがわれる(門田, 2013, p.24)。

門田は常連客が多いという点から銭湯には習慣性があることを導き出した。筆者も京都市の銭湯を観察することで、銭湯の習慣性があることを発見した。それは、人ではなく、荷物である。銭湯に入りに行くと、現在銭湯を利用している人よりも多くのお風呂道具が脱衣場に置いてあった。ここで言うお風呂道具とは主に、イス、マット、洗面器、シャンプー、リース、石鹸、など浴場で使う道具である。お風呂道具は大きいプラスチックのカゴにまとめられたり、プラスチックのイスをひっくり返してそこに収納されたりしていた。資料3は筆者が描いたお風呂道具とその置かれ方の一例である。このお風呂道具を自由に使うことはできない。なぜなら、それは銭湯によく通うお客さんの私物だからだ。ある銭湯では「この荷物は常連さんのものです。勝手に使用しないで下さい」と張り紙を張って他人が誤って使用することを防止していた。銭湯によってお客さんのお風呂道具の置かれ方は違う。それは服や荷物をしまうロッカーの上に置かれていたり、それ専用の棚があったり、月や年で借りられる



資料3 お風呂道具の置かれ方の一例
(筆者作成)

有料のロッカーを用意している銭湯もあった。有料のロッカーの場合だと、公共の公衆浴場に自分の名前が書いてある専用の鍵つきロッカーが与えられるので、盗難の恐れもなく身軽に銭湯に来ることができる。

公衆浴場というパブリックスペースに、プライベートな個人のお風呂道具がどのような経緯で置かれるようになったのだろうか。筆者は2019年8月29日に京都市の北野白梅町周辺にある源湯に入りに行った。その源湯は、休業していたが新しく店主が変わり、2019年7月7日にリニューアルオープンした銭湯だ。脱衣所には誰でも使用できる鍵つきのロッカーの下には、棚のようなスペースがあって、「荷物を置いて帰られる場合はロッカーではなくこちらに置いて下さい」という紙を張って、常連さんのスペースを確保していた。他の銭湯に比べると、源湯は置きっぱなしのお風呂道具はまだ少なかったが、これから頻繁に来る人たちが置いて帰るのだらうと予想される。源湯では店主側から常連さんの荷物を置くスペースを用意していたが、常連さんが勝手に置いて帰ってしまい、荷物の置き場ができたケースもあるかもしれない。

銭湯に来る高齢者の方は元気な方である。足腰が丈夫で自転車で来る人もいれば、杖や歩行車を利用して来る方もいる。自分で服も脱げて、他者とも会話ができて、体を洗うことができる人が来る印象を受けた。そんな元気な方たちも永遠に銭湯には通うことはできない。常連さんの荷物に、埃がかぶっているものも見られた。元気な時は、銭湯に顔を出していたが、何かの原因で来ることが難しくなったのかと思われる。店主はなぜその荷物を捨てないのだろうか。銭湯には、店主と客という関係ではあるが、それ以上に何か深いものがあるようだ。

銭湯の4代目として生まれた田村は、著書で「銭湯には幅広い世代のお客さまがいらっしゃいますが、中心となるのはご年配の方々です。こうしたお客さまは、入浴するためだけが目的で、銭湯にいらっしゃっているとは限りません。顔なじみのお客さまとの会話や、店員との何気ない挨拶を楽しみに通ってくださる方も少なからずおられます。」(田村, 2015, p.1)と述べている。家のお風呂がより効率的だと思われるが、銭湯に行く常連さんは入浴だけを目的としているとは限らないのだ。

筆者の行ったどの銭湯でも、常連さん同士だけでされる挨拶があった。筆者が銭湯の脱衣場にいる時や浴場の入口のドアを開けた時は顔を見られるだけだが、筆者の後に入ってきた(常連さんと思われる)人は「こんばんは」と言い、先に入っていた人達に「こんばんは」と声をかけられていた。銭湯に来た人は「こんばんは」と挨拶し、帰る人は「お先に」や「おやすみなさい」と馴染みの人に挨拶して出て行く様子が伺われた。この挨拶は脱衣所と浴場で聞くことができた。入浴や着替えるスピードは人それぞれなので、出会う人が違うこともある。だから、銭湯の建物内ではあるが、脱衣場と浴場で二回挨拶されているのだらう。

また、店主と常連さんの会話を聞いていた時の話だが、白内障の手術で臨時休業日がある事を店主は馴染みの客が来るたびに話をしていた。店主と馴染み客は店主の白内障の手術の話から、明日の台風では休業しないのか、地蔵盆はやるのかという話や最近の若者は地蔵さんのまえかけを縫わないという話までしていた。

銭湯を一緒に利用する常連さんどうしても、どうやら秘密があるようだ。仮に、ボディタオルをあげた人をAさん、そのボディタオルをもらった人をBさん、Bさんの背中を洗ってあげる人をCさんとする。筆者が聞いたのは、AさんとBさんの会話だ。脱衣所でAさ

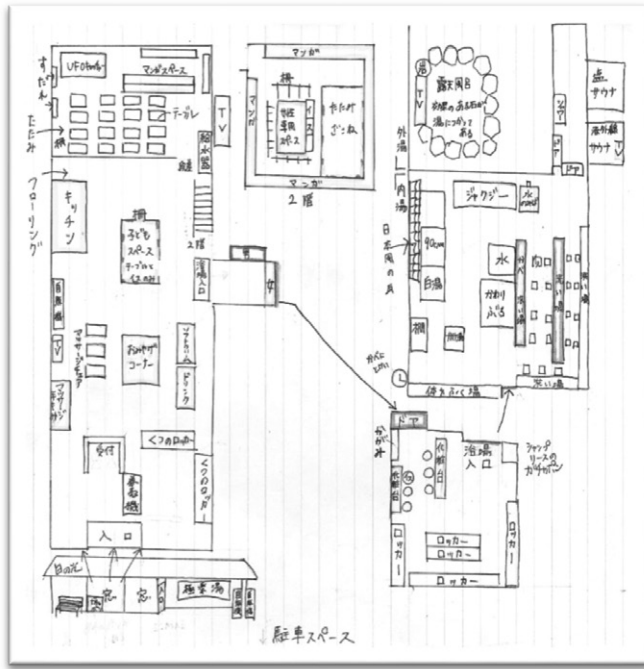
んはBさんにプレゼントしたボディタオルの使い心地を聞くと、Bさんはとても良いと言った。Aさんは、今度背中を洗ってあげるとBさんに伝えた。するとBさんはAさんに感謝したが、Cさんがいる時には、背中を洗わないで欲しいとお願いした。Cさんは浴場でBさんを見かけるとBさんの背中を洗ってあげていたそうだ。これは、Cさんの優しさであるが、実はBさんはCさんに背中を洗って欲しくなかったのだ。理由は、Cさんはゴルフで鍛えていて、力があり、Bさんの背中が赤くなるまで擦っていたのだ。Bさんは痛かったがCさんには言えなかった。最近、BさんはCさんと入浴の時間帯をずらしたり、背中を洗ってもらうのを断ったりしていた。だから、Cさんの気持ちを考えて、Cさんがいる時は、Aさんに背中を洗ってもらうのを断ったのだ。

このように、銭湯ではたくさんのコミュニケーションがなされている。常連客の中には、単身者だっているはずだ。家では一人だが、銭湯で人とコミュニケーションをとることで、孤独の寂しさ紛らわしているのかもしれない。常連さんたちの日常を非日常の筆者が覗き込むと、まるで、映画やドラマをみているような感覚だ。

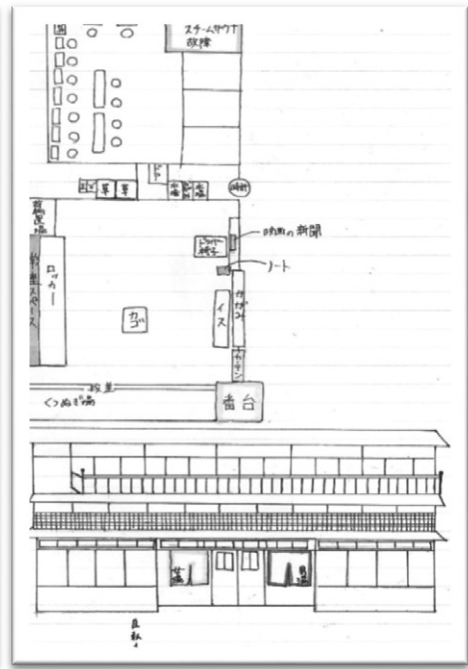
4. 利用目的の違い

3節では銭湯の習慣性について、常連さんのお風呂道具で説明して、そこから飛躍し、コミュニケーションという目に見えないものが銭湯に求められていることが分かった。4節では、目に見えるサービスの違いについて銭湯とスーパー銭湯を用いて話したい。利用者はこの二つの施設に何を求めているのだろうか。門田は利用目的の違いは、来客調査、つまり利用者へのアンケートでも確認できた。という。来客調査では、利用者に「癒し」、「清潔」、「情報収集」、「コミュニケーションの場」、「遊び」、「健康」の6つの選択肢について、銭湯、スーパー銭湯を利用する際における目的の順位付けをした。これをもとに銭湯とスーパー銭湯の利用する目的をみる。

銭湯では「清潔」が1～3位に多く、逆に「遊び」は4位以下でしかない。こうした銭湯利用者にスーパー銭湯を利用しない理由を尋ねてみた。これをみると、「値段が高い」や「場所が遠い」ことがスーパー銭湯を使わない理由としてあげられている。使わない理由としては「人が多くて落ち着かない¹²⁾」というものもある。これは利用経験がある人ならではの理由であり、決してスーパー銭湯を利用していないわけではないといえる。とはいえ、これらの人は、「レジャー感覚」の人とは別の空間で、落ち着いた・ゆっくりした時間を過ごしたいと考えていることがうかがわれる。つまり銭湯利用者は「楽しみ」を主たる目的としている訳ではなく、「清潔」が利用者の目的とされており、「値段が安い」、「自宅から近い場所にある」ことが利用者から求められている施設であるといえる。一方、スーパー銭湯の利用目的では「癒し」や「遊び」を求める人が多かった。逆に銭湯の主たる利用者の目的であった「清潔」は6項目中、下から2番目となっており、スーパー銭湯の利用目的としては意識されていないといえる。これらスーパー銭湯利用者が銭湯を使わない理由をみると、「食事がしたい」、「マッサージがしたい」といった理由があげられる。スーパー銭湯は「癒し」や「遊び」が利用者の目的とされ、より多くの「楽しみ」を感じることができる場所であることを利用者から求められている施設であるといえよう。このような利用目的の違いが両施設の間にはある(門田, 2013, p.25-26)。



資料4 スーパー銭湯 極楽湯の図面



資料5 銭湯 日の出湯の図面

門田は利用者のアンケートによって、利用目的の違いを説明した。筆者は両者の建物の図面を比較することによって、サービスの違いを発見した。

資料4は施設数が日本一の極楽湯というリラクゼーション施設の奈良店を筆者が簡単に図面化したものだ。黄色で色づけされている部分は風呂に入り体を清潔にする以外のサービスを表している。サービスには、お土産、食事、電動マッサージチェア、てもみマッサージ、大量のマンガ、ごこねスペースなどが提供されており、門田が言うように、スーパー銭湯には「癒しや」や「遊び」が用意されている。

資料5は筆者が簡単に図面化した京都にある日の出湯という銭湯である。スーパー銭湯との違いを見てみよう。スーパー銭湯の極楽湯では脱衣場に辿りつくまでにソフトクリームやスムージーなどの食べ物、お土産コーナー、てもみ屋や電動マッサージチェアなどたくさんの客を誘惑する有料のサービスがある。脱衣所のドライヤーは無料で、浴場には水のみ場があり、二階に上がると大量のマンガとごこねスペースなどの無料のサービスも用意されている。一方の銭湯は、建物の入り口から入るとすぐに脱衣場があって、すぐに浴場に行けるシンプルな構造だ。日の出湯に限らず、清潔を保つことが目的の銭湯には、脱衣場、浴場と待合室（番台がフロント形式だと待合室があったりする）。という構造が多い。サービス面では、ドリンクは置いてあるが有料で、水のみ場が無い銭湯もある。シャンプー、リンス、石鹸はスーパー銭湯のように無料で常備しているところは少ない。銭湯は、脱衣場にイスがあるとはいえ、長時間滞在しやすい空間とはいえない。実際に、常連さんは、店主や他の常連さんと脱衣所のイスに座って会話をし、すぐに帰ってしまう人がほとんどだ。待合室でも、テレビや少しのマンガ・雑誌が置いてあるが、男性が女性を待つのに利用するくらいだ。飲食スペースがあるような大きい銭湯の場合は、また異なるだろうが脱衣場と浴場のみの銭湯では、長期滞在しにくいのだ。それはなぜなのだろうか。図面を見ると、スーパー銭湯は広い敷地を利用して、お風呂に入る場所、ご飯を食べられる場所や

体を休める場所と空間が分けられている。そして、「癒し」や「遊び」を目的としたサービスを提供し、一日滞在できる居場所作りをしている。一方、狭い敷地の銭湯ではこのように空間を分けることが難しい。よって、展開できるサービスにも限度があるようだ。門田が言うように銭湯では、娯楽よりも清潔が求められているので、多くのサービスを提供しなくてもいいと思われるが、筆者が銭湯に行って不便だと感じたことがあった。例えば、トイレだ。古い銭湯だと、脱衣所にトイレがない場合がある。常連さんはそのことを知っているのだから、事前に済ましておくことができるが、初めて行く人は困ってしまうだろう。また、浴場で使うイス、マット、洗面器が用意されてない銭湯もあつたりする。常連さんは持ってきていたり、荷物を置いているので、不便ではない。しかし、初めての人は不便だと感じるだろう。常連さんの視点だけでものを考える銭湯は、改善が必要だと思われる。

上記で示したが、銭湯は価格競争ができない。一般大衆が安価に入れるために全国で価格統制がされているからだ。けれども、令和元年の10月1日の消費税率の改定に伴い、価格を値上げする都道府県が多数あり、京都府でも大人430円から450円と値上げした。理由は、令和元年10月1日からの消費税率の改定や人件費及び物価等の値上がりによる費用の増加により、公衆浴場の経営存続もあやぶまれ、業界の経営努力だけでなく、利用者に一定の負担を求めることもやむを得ないと結論を得た。上記で示したが、「その他の公衆浴場」の価格は経営者が決められるので、極楽湯も全国で値段が違うが奈良店の極楽湯では大人450円でお風呂が楽しめてしまうのだ。この値段はスーパー銭湯にしてはとても低価格であるが、銭湯の「値段が安い」という利点はなくなりつつある。銭湯が生き残るのはなかなか厳しい世の中のようなようだ。

第4章 銭湯の魅力

1. 外観の魅力

提供されるサービスに関しては、スーパー銭湯がより豊富であった。しかし、銭湯には他の魅力があると思う。まずは、銭湯の外観について紹介していきたい。町田は、銭湯は全国各地に存在するが、地域によってさまざまな違いがある。その違いは、地域の文化や人々の暮らしぶりの違いによるものともいえるだろう。銭湯はその土地の気候風土にあった様式となっていて、北海道・東北・関東・中部・関西・九州・沖縄地方に大きく分けられる。

北海道の銭湯は、歴史的背景から鑑みるに、内地から渡った人々が商売として始めたと考えてよいだろう。先住民アイヌ族には、基本的には内地のような入浴文化はなかったといわれている。北海道の銭湯は屋根に瓦を使用することはほとんどなく、積もる雪が滑り落ちやすいようにトタン仕上げとなっている。玄関が二重構造になっていて、冷たい外気が脱衣場に直接入らないように工夫されている。主たる浴槽は、浴室の中央にある。古くから港町として栄えてきた函館などは、海外文化の影響がいち早く伝わったために、早くから洋風の銭湯が登場していたようだ。東北地方は、北海道に比べると、質素な造りが多い。様式はいろいろあるが、一般の家より小さい銭湯も見かける。

関東地方は東京に近づくほど、東京型銭湯の特徴である「唐破風」のついた宮造りが多くなってくる。¹³

中部地方は、基本的には地域特有の様式は定まっていないが、なかには戦前のモダンな

洋風銭湯も散見される。

関西地方は、京都型と大阪型に大きく分けられる。空襲を免れたこともあり、京都には木造の銭湯が残っている。建物の平側に出入口を設ける「平入り」で、格子のついたものが多い。のれん¹⁴は、入口が半分隠れるほど長いものが多い。

大阪には、京都のような木造は少なく、コンクリート造りが多い。御影石の産地が近かったこともあり、浴槽や床に御影石を使用しているところも多い。九州地方には、際だった特徴こそないが、北海道と同様、港町には豪華な銭湯が多い。

最後は沖縄地方で、昭和30年代(1955～1964)には県内に約300軒はあった銭湯も、今はわずか1軒になってしまった。沖縄の特徴は、台風が多いので建物が堅固なコンクリートでできていることだ。ただし戦前は木造が多かったという。番台式ではなくフロント式で、フロントは入口玄関正面にある。脱衣場と浴場の仕切りはなく、一体となっている(町田, 2016, p.64-68)。と地域ごとに銭湯の特徴をのべている。

町田が言うように、京都市には戦前に建てられた木造の銭湯も残っている¹⁵。中京区にある錦湯(資料6)や、映画「マザーウォーター」のロケ地にもなった南区の日の出湯の他にも木造建築の銭湯があるので、京都と他地域の違いとも言える。しかし、京都には木造建築以外の銭湯もまだ多く存在する。唐破風の屋根の銭湯、洋館の銭湯、二階が店主の住宅である銭湯、一階だけでなく、二階や三階にもお風呂があるビル型銭湯など京都の銭湯といってもさまざまである。

ここで一部紹介していこう。資料7は京都市中京区にある芋松温泉だ。昭和13年～14年頃建築で立派な唐破風の建物だ(林, 2004, p.54)。資料8は京都市伏見区にある宝湯で、昭和6年建築の洋風建物だ(林, 2004, p.58)。木造ながらモルタル(砂とセメントと水とを練り

混ぜて作る建築材料)で洋風に仕上げられた「擬洋風」とよばれるスタイルだ。かつて流行したが、現在ではほとんど残っていない「人間洗濯機」という回転水流の浴槽がある。「人間洗濯機」は、京都市内には2軒ほどしか残っていないのでとても貴重である(大武, 2016, p.68-69)。京都市下

京区にある五香湯(資料9)は昭和9年創業で、スーパー銭湯という言葉もない平成元年に現在のビル型銭湯(マンションの1,2階にあたる)になり、1階には広い飲食コーナーを設け、浴室は2階建てに、立体駐車場も完備した先駆的な一軒だ(林, 2004, p.115)。資料からも分かるように皆同じ銭湯という役目をもつ



資料6 錦湯(筆者撮影)



資料7 芋松温泉(筆者撮影)



資料8 宝湯(筆者撮影)



資料9 五香湯(筆者撮影)

建物だが、見た目はそれぞれ違うのだ。次に紹介する内装は、より個人の趣向が反映しているの、さらに個性的である。

2. 内装の魅力

銭湯の外観が京都の中でもさまざまあるように、内装も銭湯によって違うのでみていきたいと思う。駅や更衣室で見かけるようなシンプルなロッカーを使用している店もあればアンティークな木製ロッカー（資料10）を使用している店もある。歴史を感じる広い格天井の銭湯（資料11）、あんま機や大きな表示板がついた体重計がある、どこかなつかしいレトロ銭湯（資料12）、浴場にインコがいる銭湯（資料13）、平安神宮庭園のモザイクタイル絵がある銭湯（資料14）、浴場にタイル絵がある銭湯（資料15）など、銭湯は各々個性的だ。銭



資料10 桜湯のアンティークなロッカー
（出典：林, 2004, p.47）



資料11 日の出湯の脱衣場を覆う格天井
（出典：林, 2004, p.44）



資料12 レトロな脱衣所の錦湯
（出典：林, 2004, p.43）



資料13 浴場にインコがいる松葉湯
（出典：林, 2004, p.34）



資料14 浴室入口に平安神宮庭園のモザイクタイル絵がある柳湯
（出典：林, 2004, p.48）



資料15 源湯十和田湖の景色が壁面に
あるタイル絵（出典：林, 2004, p.76）

湯に行くまでは、個人的に狭くて古くさいイメージがあったが、銭湯は外観だけで判断するのは間違っていた。浴槽の天井のペンキが剥がれてボロボロの銭湯から、外観は歴史を感じる銭湯だが中は綺麗に改装されている銭湯、脱衣所にディズニーのパズルを飾る銭湯や演歌歌手のカレンダーを数枚飾る銭湯やタイルになったアルフォンス・ミュシャの連作《四つの花》が水風呂の壁で見られる銭湯だってあった。

『NHK美の壺 銭湯』のコラムで、町田は、銭湯が入浴料金を徴収する商売として登場して長い年月になる。庶民の文化であり、それらの伝統がまだまだ引き継がれて残っているということ自体が重要なのである。そこには、庶民のささやかな、つかの間の至福を楽しむ空間がある。そこで、銭湯をまるごと美術館と考えるというのはどうだろうか。寺社仏閣などを鑑賞するような気持ちになってじっくりと観察してみよう。脱衣所や浴室は、いわばギャラリーということになる。天井の造りや立派な庭を、寺の庭園を見るような気分で見よう。池のあるものや、枯山水の庭もある。浴室に目をやれば、巨大な富士山などのペンキ絵があり、タイル絵はその題材も色々で、まるで絵巻物を見ているような気分させてくれる。銭湯は地域の入浴施設であり、その土地の風土習慣に合ったかたちで発展してきたものである。したがって、その土地ごとに実に様々な様式があるのは当然のこと。そんな銭湯をひとつの美術館として観察してみると以外な発見があるかも知れない(NHK「美の壺」制作班, 2009, p.65)。筆者は、京都市の銭湯に入りにはいったけだが、各々個性的な魅力を感じた。なぜそう思うかという、筆者が入浴目的だけでなく、町田のように銭湯を美術館として捉えていたからではないかと思う。

第5章 人と歩んできた銭湯

1. 常連さんの「日常」と初めて来る人の「非日常」が交差する銭湯

第3章では銭湯の外観と内装の魅力やその魅力に気づく視点を述べた。しかし、銭湯は人が利用してこそ、建築物的価値があるのだ。この章では、人に焦点をあてたい。上記でも述べたが銭湯には常連客がいて、ほぼ毎日銭湯に足を運んでいる。いつもの自宅近くの銭湯が休業日だから、週に一回違う銭湯を利用する常連さん。お金や掃除の手間などを考えると、風呂を家に造るよりも銭湯に来たほうが良いという常連さんの話も銭湯に行く中で聞くことができた。銭湯には、顧客を増やすため様々な工夫がなされている。浴室に金魚の水槽がある銭湯や上記でもあげたインコがいる銭湯など、客の楽しみの要素を増やす努力がなされている。浴室内にインコがいる銭湯に行った時、筆者はめずらしいインコの鳥小屋を長時間観察していたが、他の利用客（主に常連さん）はインコを長時間観察している人はいなかった。おもしろい演出をする銭湯、それが当たり前前の日常風景で何も気にしない常連さんと非日常空間を楽しむ初心者が交差するのはとてもおもしろい。銭湯は不思議な空間だ。

長年使っていると自分の好きな番号のロッカーやカランの使う場所が決まっている人や常連さん同士だとそういう暗黙のローカルルールを理解しているだろう。しかし、銭湯に潜んでいるローカルルールが初めての客には分からない。筆者は全部初めての銭湯に行ったが、ローカルルールを知らないことで注意を受けたことはない。筆者はスーパー銭湯で共同入浴の基本的なマナー¹⁶を知っていたので、常連さんに注意を受けたことが無かったのかもしれない。スーパー銭湯を利用してきた筆者でも知らなかったことがある。例えば、

「京都極楽銭湯読本」では京都の銭湯について紹介している。京都では、現在でもほぼ全員が脱衣籠を使っているが、脱衣籠を使わなければ、すぐに観光客と気づかれてしまう。京都には、脱いだ服を脱衣籠に入れ、その脱衣籠をロッカーに入れるという習慣があるのだ（林, 2011, p.20）。という文章を読むまで、衣服を直接ロッカーに入れてしまっていた。このように、スーパー銭湯を利用してきた筆者でさえ、知らないことがあるのだ。だから、普段公衆浴場を利用しない人や訪日外国人はお風呂に入る共同入浴についての基本的なマナーを理解してないことが多い。これは筆者が体験したことだが、筆者が銭湯から出ようとした時に訪日外国人が玄関から入ってきた。その銭湯は、玄関で靴を脱ぎ、靴をロッカーに入れて、奥のドアを開けるのだが、訪日外国人はスロープを歩いて靴を脱がずにそのまま奥のドアに行こうとしていた。靴を脱がない文化だと、靴を脱ぐ境界線が分からないのだ。常識だと思っている人と、常識がわからない人が一緒の空間を共有し、トラブルが生じることは今後の銭湯の課題といえるだろう。



資料16 錦湯の番台から見た風景(町田, 2002, p.75)

2. 性別を超えた店主

銭湯では、番台やフロントで料金の徴収や石鹸等の販売

をしている。それ以外にも番台は「板の間稼ぎ」とよばれる他人の金品や着物などを盗む泥棒を監視する重要な場所だ。その高い視線で浴室内に病人がいないかを見たり、客の多少による湯の補給を釜場に連絡したりする。そのほか客の貴重品を預かる等々、実に多忙となる場所である(町田, 2016, p.74)。町田が言うように銭湯の番台は客を監視する役目も担っているので資料16のように、脱衣所が見渡せるような造りになっている。現在では、フロント式¹⁷や番台と脱衣所間にカーテンなどをつける銭湯、番台に座らず同性の脱衣所に店主がいるような銭湯もあるが、そのまま番台を利用している銭湯もある。銭湯に慣れていない筆者は、番台が異性だと裸になるとき恥ずかしい気持ちになるが、常連さんも店主側も裸を気にしていない様子だった。

その一例をあげよう。ある銭湯では、女性の脱衣場にある(店主の家へとつながる)ドアからおっちゃん(店主)がでてきて、女湯の浴場につながるドアが少し開いていたので、きちり閉めてから、番台にいるおばちゃん(店主)に話をしにいった。また違う銭湯では、ストーブをつけようと裸のおばちゃんがいるにもかかわらず、女性の脱衣所にくる店主のおっちゃんに対して、裸のおばちゃんは、体を隠そうともせずにおっちゃんと楽しげに会話をしていた。現代で、このような裸の扱いができる場所は他にあるだろうか。

3. 銭湯の注意書き

1節で述べたが銭湯は公共の公衆浴場なので皆が気持ちよく入れるように基本的なマナーがある。体を洗ってから湯船に浸かる、サウナの後には汗を流す、湯船に髪を浸けないなどはどこの銭湯にでもある一般的な注意書きなのだが、人と共に歩んできた銭湯ならではの注意書きを見かけたのでここで筆者が行った銭湯ごとに紹介したい。

京都市伏見区にある宝湯では「曲がった硬貨を入れないで下さい 故障の原因になります 番台で取り替えます」とあった。これはドライヤーのコインタイマーに張ってあった注意書きだ。汚れた硬貨や曲がった硬貨を人に渡すのは気まずいので、自販機や人の目に付かない所で使ってしまうという行動によって、故障してしまったのだろうか。

京都市上京区にある笠の湯では、客が原因の注意書きが多かった。「お家で毛染めをされた方 ハンディキャップを付けて暖簾をくぐってください 暖簾が汚れます」、「体重計で飛んだりしないで下さい 以前の物はそれで壊れました」、「備えつきのドライヤー以外を使用しないで下さい バッテリーが落ちます」、「ゴルフボールなどを使用しないで下さい すのこが壊れます」、「サウナに塩を持ってこないでください」など笠の湯は注意書きが多い銭湯で、上記に示したものの以外にもあった。上記の注意書きは、銭湯と客との出来事から生み出されたものと思われる。暖簾が汚れた理由、体重計が壊れた理由、店のバッテリーが落ちた理由、すのこが壊れた理由、塩サウナでもないのに塩がある理由など悪気のない客と原因を探る店主の関係を想像するととてもおもしろい。

京都市左京区の平安湯では「プラスチックのカゴを床で叩かないで下さい」という注意書きがあった。これは銭湯の歴史に関する問題だ。京都の古い習慣を残すお風呂屋では、番台でお金を払うと、タイミングよく籠を床でポンポンと払い、手渡したり、脱衣場の適当な場所に置いてくれることがある。脱衣籠は、現在ではプラスチック製のものが主流となっているが、以前はほとんどのお風呂屋さんでは、籐籠や柳行李が使われていた。京都のお風呂屋さんは、床に籐しろ(籐で編んだ簡素な敷物)が敷かれていることが多く、プラスチックの籠では、籐しろを傷めてしまうと、現在でも籐籠や柳行李にこだわっているお風呂屋もある。(林, 2011, p.20) 平安湯では籠をプラスチックのカゴに変更したけれども、昔からの習慣で客はカゴを床でポンポンと払ってしまうのだろう。筆者が平安湯に行った時も銭湯に来たおばあちゃんはプラスチックのカゴを床で叩いてしまっていた。

京都市上京区の竜宮湯では、注意書きではあるがユーモアが盛り込まれているように思われる。「ドライヤーで頭以外のところを乾かさないうで下さい」、「ドアが自動で閉まるのにおもいきりしめないで下さい 優しくしめて下さい」、「ドアを開けたら、ドアを開け閉めして天井の熱い水を落として下さい (サウナのドアの前に)」、「ぶら下がらないで下さい 折れて勢いよく水がでてきます (水風呂の上から放流する水に対して)」ここでの注意書きは文字だけではなくて、イラストがついていて厳しい注意書きではないように工夫がされてあった。

次は、京都市下京区にある白山湯六条店にあった注意書きだ。「初来店のお客様へ 荷物を横にずらして洗い場をご利用下さい もし注意された場合はフロントにお申し付け下さい」これは、常連さんがカラン(洗い場)で体を洗った後に荷物をカランから移動することなくお風呂に浸かってしまい、次の人がカランを使えないことを防ぐ注意書きだ。常連さん vs 利用客でもあり、常連さん vs 店主側でもある。この注意書き以外にも、「場所取り禁止」という注意書きがあった。しかし、筆者が行った時は、常連さんたちは注意書きを気にしていなかった。カランに荷物は置きっぱなしで、湯に浸かりに行き、サウナを利用していたので、19個の全てのカランが使えなかった。荷物を横にずらすことは筆者にはできなかったので、気長に待っていた。すると、常連さんのひとりが「私もうお風呂からあがるからここを使い」と声をかけて、カランの場所を空けてくれた。営業開始の時間帯は、建物の前に

自転車がたくさん駐輪していた。脱衣所と浴場は、常連さん達がたくさん入れ替わりで入ってきて、とても地元で愛されている印象を受けた。ただ、常連さんの場所取りの主張が強い銭湯なので、開店すぐの時間帯は避けたほうが良さそうだ。

最後に紹介するのは、京都市中京区にあるトロン温泉 稲荷だ。この銭湯では、床拭きよの掃除シートがドライヤーの横に用意されていて、「いつもありがとうございます。よろしくお願い致します。」とこのような書置きがある。これは、ドライヤーをした後に出た抜け髪を、常連さんが掃除シートを使って勝手に掃除するのを感謝しているのだ。スーパー銭湯ではこのような書置きは見られない。銭湯は、公衆浴場なのでパブリックなスペースのはずだが、店主側・利用客側の両方にプライベートな所が存在することが発見できた。

第6章 銭湯の再生

上記でも述べたが、最盛期では全国に1万8,325もの銭湯があったが、現在は4,293施設と減少の一途を辿っている。平成20年度の京都府公衆浴場業生活衛生同業組合加盟組合数で京都市の銭湯の軒数は186あった（林, 2011, p.125）。令和1年に筆者が京都市の銭湯の軒数を調べると111の銭湯が残っていた。約10年で半数近くの銭湯がなくなっているのだ。しかしながら、沖縄県の銭湯は1軒しかないから、京都市では111もあると捉えるべきなのだろうか。内風呂のほうがより効率的なので、減少は仕方がないことだが、地域によって差があるのは疑問だ。今回は地域差について語らず、町から消えていく銭湯について話したい。なぜ、銭湯は文化的遺産にならず現代からひっそりと消えていくのだろうか。近代建築の保存運動に貢献した鈴木 of 建築論的立場から、保存の基礎的考察を考えてみよう。

鈴木は基礎的考察とはいえ、文化財保存においてもっとも根本的な出発点である「なぜ残したいのか」という問題から出発する。という。いかなる建築物も、実用性すなわち道具的有意義性を備えたものとして建設される。建築物が持っている道具的有意義性が、変質・消滅した時点で、保存問題は発生する。実用上何の支障もなく建物が保存の対象として問題視されることはない。時代の移ろいとともにも道具的有意義性が低下した建物、新たな開発企画と対比した時に、低い道具的有意義性しか持ちえない建物が、存在自体を問われる時に問題が表面化してくるのだ（鈴木, 2013, p.13-14）。銭湯も道具的有意義性を備えたものとして建築された。しかし、内風呂の普及とともに減少の一途を辿っている。時代の移ろいとともにも道具的有意義性が低下した銭湯にも、保存される価値があるのではないか。保存される建物とは何なのかももう少し見ていきたいと思う。

建物が道具的有意義性を変質・消滅させた時に、まず個人的な愛着、思い出、また歴史的な事実・エピソードとのつながりなどによってひきおこさせる「残したい」という気持ちがある。また、その建築が歴史的連続性の中で重要な位置を占めている（歴史的史料）という事実に対する認識が、保存へと人を駆りたてる。そうした場面にあっては、建物の中に刻みつけられている歴史的な事実・思い出などが我々に極めて大きな意味を持ち、我々がその重要性を認めるがゆえに、建物自体をも保存しようとするのだ。つまり、建物は歴史的な事実・思い出などを保証するもの（史料）として保存されるのだ（鈴木, 2013, p.14-15）。銭湯は庶民の憩いの場であるはずだから、人々の思い出はたくさんあるに違いない。しかし、銭湯の歴史的な事実・思い出の重要性が認められてないのが原因のひとつなのかもしれない。

町田によると、銭湯は庶民生活に密着した施設である。したがって、有名な建築家が設計し、一部の人々のみに使用された施設ではない。建築史的に貴重な建物ならば、取り壊しの話が持ち上がると反対運動や保存の話も出てくるが、ほとんどの銭湯はいつの間にか廃業し、取り壊されているのが現状である(町田, 2002, p.11)。また、大衆・庶民の日常生活のなかで長年培われてきたものほど、後世には残らないことが多いようだ。銭湯もそういうものの代表格であるといっておよいだろう(町田, 2016, p.1)。とも述べている。

鈴木はそもそも建物が残されるということは、やはり活用が素晴らしい形でなされているから保存される。活用されないことには、保存自体がむずかしくなってくる。(省略)つまり、残したいということと、ほとんど同時進行で、そのためにはどういう使われ方があるだろうかということを考えないといけないのだ(鈴木, 2013, p.18)。

鈴木は建物の保存に関して再利用の仕方も考える必要があると述べている。銭湯はお風呂に入るための施設だから、ありのまま残すことは難しい。ここで銭湯再生に成功した一例をあげよう。京都では平成11年廃業になった藤森湯という銭湯だが建物をそのままのカフェやセレクトショップが入る複合ショップ「離楽庵 WOOD-INN」として再生している。その中でも、浴室をそのまま客席に改装したカフェ「さらさ西陣」では、昔の銭湯で使用していたマジョリカタイルをそのまま利用し、店内をエキゾチックな雰囲気仕上げている(林, 2011, p.13)。筆者は平成23年以降に廃業した銭湯のうちの27軒を訪ねてみた。建物が全壊されてガレージになったのが2つ、更地になったのが2つ、建物が残って看板がついたまま廃業しているのが5つ、看板を取って銭湯の外装をそのまま住居として利用しているのが3つで、銭湯の外装をそのままにして事務所などに再利用されていたのは2つ(どちらもビル型銭湯だった)、全壊され新しい住宅になったのが13軒だ。このことから分かるように、銭湯の再生利用はなかなか難しいのである。

結論

これまでの章を振り返っていこう。第2章では、入浴の変遷について書いた。日本の入浴は、仏教の伝来とともに発展した。現在のような浴槽にたっぷりお湯をいれた温湯浴ではなく、蒸し風呂の様式で、蒸気を閉じ込めるためにさまざまな工夫がなされた。また、江戸では男性の享楽としても利用されたが幕府による取り締まりがあった。明治10年(1877)には、狭い入り口のざくろ口を取り払い、浴槽を板の間に沈め、浴室の天井を高くして湯気抜きの窓を設けた「改良風呂」が誕生した。大正時代に入ると、銭湯業界に「改良風呂」以来の大きな変化が現れる。それが、「タイルの使用」だ。さらに昭和3年(1927)には、浴室の湯・水に水道式のカランが取り付けられ、衛生面でも向上していった。昭和30年代(1955～1964)に入ると浴場数は急激に増加し、戦後の庶民生活を支える重要な公共施設として活躍した。銭湯の浴室にシャワーがつくようになったのは、昭和30年代(1955～1964)に入ってからだ。そして、各家庭に内風呂が浸透し始めるのも丁度この時期で、銭湯が減少の一途を辿り始めた。今日は、ヘルスセンター、健康ランド等郊外的大型レジャー浴場等に加え、一般公衆浴場並みの料金で食事や休憩、娯楽施設も併せ持つスーパー銭湯の増加が目立っている。一方で、一般公衆浴場(銭湯)は4,293施設となり相変わらず減少しているらしく。そこで、健康ランドやスーパー銭湯の誕生についても記述した。

現在では銭湯・健康ランド・スーパー銭湯が町に存在するがどのような違いがあるのだろうか。そこで、第3章では、銭湯とスーパー銭湯の違いをみていくことにした。1節では、法律の規定による銭湯の違いをみた。公衆浴場は、公衆浴場法によって「一般公衆浴場」と「その他の公衆浴場」に分けられる。「一般公衆浴場」とは地域住民の日常生活において保健衛生上必要なものとして利用される施設で、物価統制令によって入浴料金が統制されているいわゆる「銭湯」の他、老人福祉センター等の浴場がある。「その他の公衆浴場」とは保養・休養を目的としたヘルスセンター・健康ランド型のもの、ゴルフ場やアスレチックジム等スポーツ施設に併設されるもの、工場等に設けられた福利厚生のための浴場、サウナ、個室付き公衆浴場、移動入浴車、エステティックサロンの泥風呂等がある。「一般公衆浴場（銭湯）」は新規開業する場合に隣の公衆浴場との間に一定の距離を置かなければいけない。また、料金の上限が決められているなどの規制がある一方で、水道料金や固定資産税の減免措置を実施している自治体が多い。一方で、スーパー銭湯の料金がまちまちなのは価格統制がないので市場によって決められるからだ。次の2節は、利用客の違いをみて、銭湯の利用客の半数近くが高齢者であることが分かった。3節では、その利用客達の利用頻度について記述した。筆者の観察では、公衆浴場にも関わらずお風呂道具を置いて自宅に帰る常連さんがみられ、銭湯には常連さんがほぼ毎日通う「習慣性」がみられた。そして、常連さんが毎日通う理由は、体を清潔にする目的だけでなく、店主やその他の利用客とコミュニケーションをとることが目的のひとつであり、目にみえないサービスが必要とされているようだ。4節ではスーパー銭湯の提供されるサービスの豊富さについて図面を用いながら説明し、スーパー銭湯では、長期滞在できる空間作りがなされていた。スーパー銭湯のサービスを銭湯に全て導入するのは、敷地面積で難しいことが多い。しかし、銭湯側も常連さんの視点だけでなく、銭湯初心者の視点も踏まえて、出来る限りのサービスを考える必要があると筆者は主張する。

第4章では、銭湯の魅力について記述した。1節では、銭湯は気候風土、地域の文化や人の暮らしぶりによって、全国で違いが見られるが、京都に限定しても、建築物の多様性があることを伝えた。2節では、内装の違いをみてきた。店主により、趣味思考が違うので個性がより見られた。銭湯と同じ名前でも、統一されているが、各々が個性的で、世界に一つだけの花ではないが、世界に一つだけの銭湯だ。このように銭湯を美術館と違って、鑑賞する楽しみ方は、銭湯ファンを増やすことができるのではないだろうか。

第5章では、銭湯は、やはり人が使ってこそ銭湯だということで、人に焦点をあてた。1節では、共同入浴における基本的なマナーを熟知している常連さんと共同入浴に親しみのない初心者が一緒になるので、なるべくトラブルを避けたい。常識は全員の常識ではないと理解できる寛容な常連さんと共同入浴のマナーを初心者にも知ってもらう対策が必要だ。2節では、筆者が体験談から性別を超えた店主を記述し、3節では、人と共に歩んできた銭湯ならではの注意書きをみた。銭湯はパブリックなスペースの公衆浴場のはずだが、店主側は常連客が掃除道具を使って掃除することに感謝し、また利用客側も場所取り禁止と書いてあるのにも関わらず、場所取りをしてしまう。そんなプライベートな空間がにじみ出ているのは興味深い点だ。

第6章では、銭湯はなぜ町からひっそりと消えていくのかを、文化的保存建築物の観点から述べた。銭湯のように庶民生活に密着した施設は大衆・庶民の日常生活のなかで長年

培われてきたものほど、後世には残らないことが多いので、銭湯が文化遺産になるのはまだまだ先のことだと思われる。上記でも述べたが、平成23年以降に廃業した銭湯のうちの27軒を現存する銭湯に行くついでに訪ねてみた。建物が全壊されてガレージになったのが2つ、更地になったのが2つ、建物が残って看板がついたまま廃業しているのが5つ、看板を取って銭湯の外装をそのまま住居として利用しているのが3つで、銭湯の外装をそのままにして事務所などに再利用されていたのは2つ（どちらもビル型銭湯だった）、全壊され新しい住宅になったのが13軒だ。このことから分かるように、銭湯の再生利用はなかなか難しいのだ。銭湯の保存・再利用は難しいので、銭湯の価値に気づいて現存する銭湯に入りに行ってもらいたい。銭湯はこれからも減少していき、いつかこの世から消えてしまうかもしれない。そうすると、筆者が見てきた、この豊かな世界がなくなってしまうのだ。

便利さを追求する現代では、銭湯の他にも消えていく文化があるだろう。その消えていく文化にも豊かな世界が広がっているのだ。そういうことを忘れないでもらいたい。

脚注

- 1 施浴とは貧しい人々や病人・囚人らを対象として浴室を開放して入浴を施すこと。『公衆浴場史』によると、聖武天皇の皇后である光明皇后（701～760年）が奈良の法華寺にて施浴を施したとされる説話が、日本の仏教史『元享釈書』に記述されているという。当時の大きな寺院には、たいてい「湯屋」とか「浴室」と書かれた建物があり、中央には、大きな釜が置かれ、そこに熱湯がそそがれて、部屋を蒸気で満たしていた。それは、いわゆる「蒸気風呂（サウナ）」であった。「湯屋」や「浴室」は無料だったので、多くの人々がやって来た。そうした人々に対し、僧侶が仏教を布教していったのだ。
- 2 『慶長見聞集』は三浦茂正によって書かれた。1614年に出版されたとされる江戸初期の庶民生活における世相や風俗を記した随筆集である。
- 3 柘榴口の語源であるが、江戸期を代表する笑話集『醒睡笑』^{せいすいしょう}（安楽庵策伝著、1623年）によると、「屈み入ると云ふを鏡鑄ると云にとりなしたる也」とある。昔は鏡が金属製だったため、磨くには酢の強いざくろ酢や梅酢を使用した。ひるがえって、低い位置にある入口を入る時には、屈んで入る必要がある。「ざくろ口」というのは、この「鏡鑄る」と「屈み入る」をかけたことからの洒落言葉と説明している。また、客が浴室に入る時に背を丸くして入る姿が蛇に呑まれるように見えるところから「蛇喰口」と呼ばれていたのがなまったとの説もある。
このざくろ口は、その様式も銭湯により違いがあった。形はおもにカーヴのある「唐破風」^{からは}と呼ばれる寺社仏閣に使用される屋根の形のものや鳥居の形のものなど、装飾も金箔を使用したものや飾り彫刻のあるもの、漆塗り仕上げ、美しく絵の描かれたものなど、実に趣向を凝らした造りになっていたようだ。当時、庶民の使用する建物の外観に豪華な唐破風様式などを使用することは、基本的に禁じられていた。そのため、外からは見えない内部で、このように銭湯ごとに個性を競ったのだろう。
- 4 老中 松平定信の寛政の改革の一端として、1791年「男女入込湯」禁止令以後、銭湯の「女湯」「男湯」の区別ができた。脱衣場から浴槽までの仕切が設けられ、入口の作りなどにも変化が起こった。現在の一軒の湯屋が左右にわけた男湯と女湯の形態をなしたのは、この寛政の入込湯禁止以後ということになる。男女が完全に分かれるようになる経過

として、一つの浴槽の水面だけに仕切りの板をつけて、入浴だけを左右に分けたことから、やがて境に羽目板を設け目隠し程度となり、さらにそれが流し場から脱衣所まで仕切り、入口も別にするようになった。

- 5 番台は、銭湯の入口に一段と高い座を設けて、湯屋の主人または女房が座り、入浴料を取り、流しの札を売り、その他入浴者の世話をやき、脱衣場の監視などを掌った。
- 6 脱いだ着物は棚に入れるか、戸つきロッカーのようなところへしまう。風呂敷に包んで床に置くところもあったようだ。
- 7 三助とは銭湯で風呂を焚いたり入浴客の体を洗ったりする男性のことである。
- 8 明治30年前後の東京の風俗を記録した『東京風俗志』（平出鏗二郎、1899～1902）による。
- 9 健康ランドの発祥地は諸説ある。
- 10 従来の銭湯は、浴槽は大中小の3種類ほどが多かった。しかし、繁盛している銭湯は、多種多様の風呂（露天風呂、電気風呂、ジャグジー、座り風呂など）を用意していることが多い（町田、2016, p.187）。
- 11 このスーパー銭湯は、『癒し』・『非日常』・『自然』を主なコンセプトとしており、従来のスーパー銭湯の10倍近い「露天風呂」を持ち、温泉旅館を思わせる「和風デザイン」は、多くの人の注目を集め、瞬く間に全国に広がった。その他、100席を超える広い食事処や、本格的なボディケアも整備され、「館内滞在時間」と「客単価」を上昇させた。
- 12 スーパー銭湯にいかない要因で「人が多くて落ち着かない」というのもあげられていた。銭湯にもよるのだが、利用客が少ない時間帯をねらえば、銭湯を独り占めできることもある。筆者も銭湯で一人きりになったことが幾度かある。家風呂でもないのに大きいお風呂を独占できるのは銭湯の良い点だ。
- 13 東京では戦後、宮造りの銭湯が流行し、寺社仏閣で使用される唐破風や千鳥破風の玄関を持つ銭湯がほぼ同じ様式で次々に建てられた（松本、2015, p.16）。
- 14 のれんには、京都型、大阪型、東京型、近年では北海道型、カウンター型と呼ばれるものがある。京都型は、二房で丈が長く男女二枚に分かれているもの、大阪型は、三房にわかれた大きな一枚物、東京型は房が五つに分かれていて丈の短い横長の一枚をさす（林、2011, p.37）。
- 15 建物が戦前に建てられたかどうかを見分ける方法は、木造建築の場合、外壁に板張りなど可燃材が使われていれば、戦前築と考えてほぼ間違いない。昭和25年に制定された建築基準法で、外壁をモルタルなど防火仕様にするのが定められた（林、2011, p.25）。
- 16 共同入浴の基本的なマナーとは京都府浴場組合ではこのように記されている。
「酔っている人は入れません。浴槽への飛び込みなどは禁止！泳いだり潜るのもやめましょう。タオルは浴槽に入れないでください。浴槽のフチなどにおいてください。浴槽に浸からないよう、長い髪は結ってください。シャワーを使う際は立たないで。お湯が他の人にかからないようにご注意を。洗い場ゾーンや脱衣場のロッカーは1人1つ。他の人へのご配慮をお忘れなく。」
その他にも、入浴の最初にかけ湯をして、体の汚れをとる。サウナ後は、汗を流してから水風呂に入るなどがある。内風呂の普及率とともに、日本人でも共同風呂を利用する経験がない人だっている。なので、この共同入浴の基本的なマナーを知らない人がいても当然なことなのだが、ルールを知っている常連さんが初心者にきつく注意を

するトラブルが銭湯では発生しているようだ。

- ¹⁷ 現在の銭湯の受付は、大きく分けて昔ながらの番台式と、最近増えつつあるフロント式がある。入口から男女別に分かれている番台式と違い、フロント式の所では料金を払ってから、男女別の脱衣場に入る。フロントから脱衣場は見えないようになっている。(新潟公衆浴場組合)

参考文献・参考資料

- 大武千明, 2016, 『ひつじの京都銭湯図鑑』 創元社.
- 門田和也, 2013, 『埼玉県中央地域における銭湯とスーパー銭湯の共存』 国士舘大学地理学報告 No.21.
- 鈴木博之, 2013, 『保存原論——日本の伝統建築を守る』 市ヶ谷出版社.
- 田村祐一, 2015年 『銭湯の番台が心がけている常連さんが増える会話のコツ』 株式会社プレジデント社.
- NHK「美の壺」制作班, 2009, 『NHK美の壺 銭湯』日本放送出版協会(NHK出版).
- 林宏樹, 2011, 『京都極楽銭湯読本』 淡交社.
- 林宏樹, 2004, 『京都極楽銭湯案内』 淡交社.
- 町田忍, 2002, 『SENTO——The Japanese Public Bath in the 20thCentury』 有限会社DANぼ.
- 町田忍, 2016, 『銭湯——「浮世の垢」も落とす庶民の社交場』 ミネルヴァ書房.
- 松平誠, 1997, 『入浴の解体新書——浮世風呂文化のストラクチャー』 株式会社 小学館.
- 温浴ビジネスマネジメント&プランニング小林経営企画事務所, 公衆浴場の歴史と変遷, 閲覧日2020年1月27日, <http://www.kobayashi-k-k.jp/tsushin1.html>
- 株式会社玉岡設計, スーパー銭湯の登場, 閲覧日2020年1月27日, http://www.tamaoka-sekkei.co.jp/sentou/sentou_ev01.html
- 京都府健康福祉部生活衛生課, 京都府公衆浴場入浴料金統制額の改定について, 2019年9月, 閲覧日2019年12月21日, <https://www.pref.kyoto.jp/seikatsu/news/press/2019/9/nyuuyokuryoukintouseigaku.html>
- 京都府浴場組合, 銭湯の利用方法, 閲覧日2020年1月27日, <https://1010.kyoto/>
- 厚生労働省, 公衆浴場業概要, 2015, 閲覧日2019年12月17日, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/seikatsu-eisei/seikatsu-eisei03/04.html
- 極楽湯ホームページ, 閲覧日2019年12月21日. <https://www.gokurakuyu.ne.jp/about/>
- 総務省統計局, 住宅の設備, 閲覧日2020年1月27日, https://www.stat.go.jp/data/jyutaku/2008/nihon/2_5.html
- 新潟公衆浴場組合-新潟市公衆浴場協同組合, 初めての銭湯, 閲覧日2020年1月27日 <http://niigata268.com/guide/first-step/>